



はじめに

今から80年前、昭和16（1941）年12月7日¹、日曜日の朝を迎えたばかりのハワイの真珠湾は、戦火の海と化していた。日本海軍機動部隊の航空機による攻撃が始まったのである。今では観光地として名高い真珠湾はハワイ諸島のオアフ島南部に位置しており、当時も今も米海軍の一大根拠地で、周囲を山に囲まれ、湾口は狭く湾内の水深は浅いことから、敵の攻撃を受けにくいはずの軍港であった。

この真珠湾の湾口を取り囲むように、日本海軍先遣部隊の潜水艦が配置されていた。その陣容は、第1、2、3潜水部隊と特別攻撃隊、要地偵察隊の計27隻にのぼる潜水艦群で、それぞれの潜水艦には機動部隊の掩護、機動部隊航空機が不時着した場合の人員収容、敵出撃部隊の攻撃等の任務が付与されていた²。特に真珠湾の湾口付近には、特別攻撃隊5隻の潜水艦が配置され、その潜水艦の甲板には特殊潜航艇（以下「特潜」と呼ぶ³）がそれぞれ1隻ずつ搭載されていた。湾内に在泊している米海軍艦船に対する魚雷攻撃が計画されていたのである。

本稿では、これら5隻の特潜に焦点をあて、その開発経緯、作戦計画とその遂行の状況、戦後編さんされた記録、真珠湾上空から撮影された写真の解析、海底に沈んだ特潜の発見等について再整理を行い、ハワイ作戦に参加した特潜の搭乗員10名と、彼らが搭乗した5隻の特潜が残した80年間の航跡を振り返る。

1 特潜の開発と搭乗員の訓練

特潜の開発は、昭和7年頃から始まっていた。その頃の特潜の使用方針は、「人間が乗った大型魚雷状の潜航艇をもって敵艦を襲撃し、魚雷を発射して必中を期する新兵器⁴」といったものであった。その後、研究や試作が繰り返され、昭和13年秋には概ね完成段階に達していた。昭和14年7月、2隻の製造が呉海軍工廠に発令され、昭和15年4月末に1隻目の特潜が、同年6月末に2隻目の特潜が完成していた⁵。

特潜の開発とともに搭乗員に対する教育が開始された。昭和15年11月、搭乗員として岩佐直治中尉と秋枝三郎中尉が、特潜を搭載する母艦「千代田」への乗り組みを命じられた。「千代田」には特潜が12隻搭載できるように改装工事が施され、着々と準備が進められていた。岩佐中尉と秋枝中尉は、下士官と共に同年12月から第1期訓練を受けていた。呉にある海軍工廠内において座学による講義を受けた後、瀬戸内海の倉橋島

¹ 本稿において真珠湾周辺での作戦について記述するにあたっては、当時のハワイ現地時刻を使用する。日本との時差は19時間30分であった。

² 防衛庁防衛研修所戦史部『戦史叢書 潜水艦史』（朝雲新聞社、1979年）93-94頁。

³ 当時、海軍省は第1次特別攻撃（真珠湾攻撃）と、第2次特別攻撃（シドニー港攻撃、マダガスカル島、ディエゴスワレス攻撃）で使用した10隻のみを特殊潜航艇と呼称し、それ以外を甲標的と呼称した。

⁴ 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 ハワイ作戦』（朝雲新聞社、1967年）161頁。

⁵ 同上、162頁。

付近において「千代田」から特潜を投下して、発進する訓練を行っていた。

その後、搭乗員の訓練は、愛媛県の佐田岬半島にある三机湾に移されて行われた。三机湾が特潜の訓練基地に選ばれた理由は、海軍部内においてもその開発は極度に秘匿されており、秘密保持が容易な場所であったからである。細長く突き出た佐田岬半島は、陸地からの人の出入りが少なく秘密保持に最適で、瀬戸内海に面した三机湾は波が穏やかで、実験や訓練にも最適の場所であった。この三机湾において昭和 16 年 3 月 12 日から 20 日にかけて第 1 期訓練が実施された。引き続き 8 月末までに第 2 期訓練が、11 月末までに第 3 期訓練が実施された。

2 特潜を用いた作戦計画とその実施

日本海軍が計画していた対米作戦は、漸減邀撃作戦というものであった。それは、潜水部隊を遠方にある敵主力艦隊の出発点付近に配備し、敵艦隊を追尾しながら、日本本土へ来航するまで襲撃を繰り返し、敵の勢力を減殺することによって、艦隊決戦を有利に導くといったものであった。つまり、特潜を「千代田」から発進させ、敵艦船に対する魚雷攻撃を実施し、敵の兵力を消耗させる考えであり、敵港湾に在泊する艦船攻撃に使用するという考えはなかったのである。ところが、航空機による真珠湾攻撃が議論される中、敵港湾への襲撃が真剣に検討されるようになった。航続距離が短い特潜を潜水艦で隠密裏に運搬し、開戦劈頭、敵港湾内に進入させて、敵艦船を攻撃する作戦が考え出されたのである⁶。

昭和 16 年 9 月、この作戦案は山本五十六連合艦隊司令長官まで上申されたが、その時は、攻撃後における特潜搭乗員の収容方法が確実でないという理由で却下された。その後、特潜搭乗員の収容方法が再検討され、昭和 16 年 10 月 11 日から戦艦「長門」で実施された図上演習の際に、山本長官に再び上申、承認を得たことにより特潜のハワイ作戦参加が決定した。

作戦に参加する特潜は 5 隻。真珠湾に進入する順序を決めておき、最後の艇が日の出の 1 時間前に湾口を通過するように、各艇 30 分間隔で発進、湾内に進入して海底に沈座、日没を待って攻撃を行った後、夜間にフォード島を左に見ながら 1 周し、湾外に出て収容地点に向かうよう計画された。その後、搭乗員の熱望により、機動部隊の空襲第 1 撃後、状況により昼間に攻撃を行い得るよう改められた⁷。

昭和 16 年 12 月 7 日、暗闇の中、母艦である潜水艦は浮上した状態で待機していた。特潜の搭乗員は、母艦潜水艦のハッチを出た後、甲板に搭載されている特潜のハッチを通して特潜に搭乗した。特潜のハッチが閉ざされた瞬間、艇内の空気は外気と遮断された。特潜は母艦潜水艦の後甲板に、艇首を母艦潜水艦の艦尾の方に向けて搭載されており、母艦潜水艦は潜航する際、真珠湾とは反対方向に針路をとった。潜航後、母艦潜水艦から発進した特潜は、真珠湾に向けて航走し始めた。その時刻と位置、搭乗員は、下表のとおりである⁸。

母艦名 ⁹	発進時刻	発進位置 ¹⁰	指揮官	同 付
伊 22 潜	7 日 0116	171 度 9 マイル	岩佐直治大尉	佐々木直吉 1 曹
伊 16 潜	7 日 0042	212 度 7 マイル	横山正治中尉	上田定 2 曹

⁶ 佐々木半九・今和泉喜次郎『鎮魂の海』（読売新聞社、1968 年）27-29 頁。

⁷ 『戦史叢書 ハワイ作戦』187 頁。

⁸ 「先遣部隊戦闘詳報（其の一）」（防衛研究所蔵）。

⁹ 母艦となった潜水艦の名称は「伊号第二十二潜水艦」などであった。ここでは略して「伊 22 潜」などと記述する。

¹⁰ 発進位置は、真珠湾の湾口からの方位、距離を示す。

伊 18 潜	7 日 0215	150 度 12.6 マイル	古野繁美中尉	横山薫範 1 曹
伊 20 潜	7 日 0257	151 度 5.3 マイル	広尾彰少尉	片山義雄 2 曹
伊 24 潜	7 日 0333	202 度 10.5 マイル	酒巻和男少尉	稲垣清 2 曹

酒巻少尉が所持していた海図¹¹の複製史料は現在、防衛研究所が保管しているが、その海図には真珠湾内における航路計画、すなわち、針路、距離、変針点、変針時刻などが記入されている。真珠湾内における航走距離と変針時刻を計算すると、計画上の使用速力が予定航路に沿って 4 ノットであったことが判明する。酒巻は特潜の速力区分を「全速力 24 ノット、半速力 10 ノット、微速力 6 ノット、最微速力 4 ノット¹²」と記録しており、4 ノットは「最微速力」にあたる。特潜は電池で電動機を回転させ、推進力を得ることから、高速力を使用すれば電池の残量が急激に減少するため、緊急時以外は低速の最微速力を使用したものと思われる。

特潜を発進させた各母艦潜水艦には、ラナイ島西方において攻撃を終了した特潜の搭乗員を収容する任務が残されていたが、結局のところ 1 隻も収容することはできなかった。

3 特潜をめぐる各種記録と戦果をめぐる議論

特潜による真珠湾攻撃の事実は、昭和 17 年 3 月 6 日午後 3 時の大本営発表により公にされ、翌朝の新聞により、多くの国民が知ることとなった。「特別攻撃隊の壮烈無比なる真珠湾強襲に関してはすでに公表せられたところ、この世界の心胆を寒からしめたる攻撃の企図は、攻撃を実行せる岩佐大尉以下数名の将校の着想にもとづくものにして、・・・(中略)・・・古今に絶する殉忠無比の攻撃精神は、実に帝国海軍の伝統を遺憾なく発揮せるものにして、今次大戦史劈頭の一大偉勲というべし。」特別攻撃隊中の戦死者は、昭和 16 年 12 月 8 日付で「特に 2 階級を進級せしめられたり」と伝えられた。

ハワイ作戦における特潜の行動や戦果の有無については、長く議論の的になっている。『戦史叢書 ハワイ作戦』(昭和 42 年)と『戦史叢書 潜水艦史』(昭和 54 年)は「特殊潜航艇は 1 隻も帰還しなかったのですがその詳細は不明であるが、戦後入手した米側資料を参考としてその動静を検討」した結果、「岩佐艇と横山艇の 2 隻が湾内潜入に成功し攻撃を決行したことは確実といえるし、戦後真珠湾港外で引き揚げられた 1 隻と酒巻艇が潜入に失敗したことは確実であるが、残り 1 隻は消息がわからない¹³」とし、「特別攻撃隊の攻撃は残念ながら実撃成果を得ていないが、敵に大きな脅威を与えたことと、日本軍に特攻精神を盛り上げた効果は大きい」と述べている。また、昭和 54 年刊行の『日本海軍潜水艦史』には、「横山艇は、港内に侵入したことは、電信連絡のあったことから、ほぼ確実である¹⁴」との記述がある。

さらに、関係者が記録に残したのものとしては、特潜に搭乗していた酒巻和男が刊行した『捕虜第一號』と『俘虜生活四ヶ年の回顧¹⁵』があり、実際に作戦を指揮した佐々木半九と今和泉喜次郎の共著『鎮魂の海』も刊行されている。他に、佐野大和著『特殊潜航艇¹⁶』やその他の書籍や雑誌などに多くの記事が掲載されている。

一方、米国側にも当時の記録と同時に、戦後出版された書籍や記事など多数ある。当時の記録として、昭和 16 年 12 月 7 日に真珠湾内に停泊していた艦船が作成していた Action Report (戦闘報告書)がある。90 隻余

11 「ハワイ特別攻撃隊隊員所持の海図」(防衛研究所蔵)。

12 酒巻和男『捕虜第一號』(新潮社、1949 年) 21 頁。

13 『戦史叢書 ハワイ作戦』400-402 頁、『戦史叢書 潜水艦史』100-102 頁。

14 日本海軍潜水艦史刊行会編『日本海軍潜水艦史』(信行社、1979 年) 328 頁。

15 酒巻和男『俘虜生活四ヶ年の回顧』(東京講演会、1947 年)。

16 佐野大和『特殊潜航艇』(図書出版社、1975 年)。

の艦船が作成した報告書が現在 Naval History and Heritage Command¹⁷のウェブサイトで公開されており、インターネットを通じて閲覧可能である。

当時の状況を知るうえで重要な 1 枚の写真が防衛研究所に残されている。ハワイ作戦の際、日本海軍の雷撃機が真珠湾の上空から撮影した写真¹⁸である。平成 6 年になって、その写真をアリゾナ・メモリアル¹⁹の歴史研究者であるダニエル・マルティネス (Daniel Martinez) が、Autometric という会社に、精密な解析を委託した。解析の目的は、この写真に写っている物体が特潜である可能性と、写っている雷跡が特潜から発射された可能性について確かめることであった。同社が提出した報告書¹⁹の主要な部分は以下のとおりである。

- ・写真が撮影された時刻は、08:01~08:03 の間である。
- ・物体の位置は、北緯 21 度 21 分 04.2 秒、西経 157 度 57 分 12.5 秒²⁰である。
- ・物体の寸法は、長さ 18.2 メートル±2 メートルである。
- ・物体は、「CERTAIN SUBAMRINE」(潜水艦確実)であり、魚雷を発射した。

この報告書から、写真に写り込んでいる物体は特潜であると考えられる。また魚雷が残した航跡についても、特潜から発射された魚雷のものである可能性が高いと考えられる。しかし、それらについても多くの議論がなされており、確証は得られていない。今後、さらに議論が重ねられ史実が確定されることを期待したい。

4 残された特潜

ハワイ作戦で真珠湾に向けて発進した 5 隻の特潜は、作戦終了後、様々な形でその姿を現すことになる。しかし、そのうち誰が乗艇していたかを確実に判別できる特潜は、酒巻艇と岩佐艇の 2 隻だけである。酒巻艇は母艦潜水艦から発進する際、ジャイロコンパスの不調から針路の保持が困難となり、真珠湾の反対側にあるペローズ飛行場付近の浜辺に打ち揚げられた。指揮官であった酒巻少尉は、そこで米国側に捕らえられた。

岩佐艇と判断できるのは、真珠湾内において米海軍駆逐艦「モナハン」により爆雷攻撃を受け撃沈された艇である。昭和 16 年 12 月 20 日に引き揚げられ、特潜内に残されていた遺体に大尉の階級章が残されており、大尉は岩佐しかいないことから、岩佐艇と判断された。昭和 22 年に、その階級章は父親のもとに戻された。

3 隻目の特潜は、昭和 35 年 6 月 13 日、訓練中の米海軍スキューバ・チームにより、現在は埋め立てによりダニエル・K・イノウエ国際空港 (旧ホノルル国際空港) の滑走路となっている場所で発見された。発見当時、特潜は水深 22 メートルの海底に沈んでおり、魚雷が未発射状態であったため、魚雷のある船体前部を切り離し、サルベージ艦により後部のみ引き揚げられた。昭和 36 年 7 月に日本に返還され、前部を修復し、現在は広島県江田島市にある海上自衛隊第 1 術科学校に展示されている。

4 隻目の特潜は、平成 2 年にハワイ大学の潜水艇調査により、船体後部の 1 部が発見された。さらに、その後の捜索により平成 21 年 3 月に、特潜の司令塔部分を含む、船体前部も発見された。また、5 隻目の特潜は、平成 14 年 8 月に同じくハワイ大学の潜水艇調査により、湾口から 2.5 マイル、水深 400 メートルの海底で発見された。海底に眠る艦船は、米国では墓場としての扱いを受けると同時に海洋環境の保護のため燃料油などの漏洩を防ぐために引き揚げられる可能性は低く、この 2 隻の特潜も現在の地に安置され続けるであろう。

¹⁷ Naval History and Heritage Command, “*WWII Pearl Harbor Attack Action Report*”

< <https://www.history.navy.mil/research/archives/digital-exhibits-highlights/action-reports/wwii-pearl-harbor-attack.html> >, accessed on November 24, 2021.

¹⁸ 「真珠湾攻撃アルバム」(防衛研究所蔵)。

¹⁹ Autometric Incorporated, “Analysis and Final Report on Japanese Midget Submarine Activity in Pearl Harbor on December 7, 1941” (Dec. 1994).

²⁰ この緯度と経度が示す位置は、真珠湾内フォード島の南東側付近海域である。

おわりに

軍神九柱の合同海軍葬が昭和 17 年 4 月 8 日、日比谷公園斎場において挙行された。当時の新聞には、「全国民の心魂を胸底から揺り動かし、感激の涙に咽ばせた特別攻撃隊岩佐直治中佐以下九柱の軍神の合同海軍葬儀は、戦死の命日たる八日午後二時から執行される²¹⁾」と報じられている。

一方、日本人捕虜第 1 号となった酒巻は、4 年間にわたり米国内に点在する捕虜収容所に収容され、戦後、昭和 21 年 1 月 4 日に帰国を果たしている。帰国後、「生きて虜囚の辱めを受けず」という「戦陣訓」の言葉に縛られ、その存在が抹消されていた彼とその家族にとって苦悩の日々が続いた。しかし、彼は民間企業に就職し、そこで指導者として輝かしい功績を残し、平成 11 年 11 月に亡くなった。

特別攻撃隊の 5 隻の特潜に乗艇した 10 名の海軍軍人は、日米開戦の初戦において極めて難易度の高い作戦に従事した。任務を遂行するにあたって、彼らは暗闇の中、「恐怖心」と戦いながら「勇敢さ」、「責任感」を十分に発揮したことと思う。その任務の困難さは、想像を絶するものがあつたに違いない。

令和 3 年 8 月、愛媛県の地方新聞²²⁾に「戦死の仲間と同じ碑に 真珠湾攻撃で『捕虜 1 号』故酒巻さん」と題された記事が掲載されていた。その内容は、特潜の訓練地であった愛媛県伊方町三机湾の須賀公園に、真珠湾で戦死した 9 名を慰霊する「九軍神慰霊碑」があり、その慰霊碑の近傍に、亡くなった酒巻を含む 10 名を「千代田」艦上で撮影した記念写真を掲示した史跡を作るというものであった。今から 80 年前、「千代田」艦上で撮影された記念写真が、時を経て史跡として建立されるとのこと。

特潜が残した 80 年にわたる航跡は、今もなお、歴史上の未解明の案件として残されている。このような史実をどのように後世に伝えていくのか、戦後生まれの我々に与えられた宿題ではないだろうか。

(2021 年 11 月 29 日脱稿)

プロフィール

profile

戦史研究センター戦史研究室

所員 石丸 安蔵

専門分野：日本海軍史

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111 (内線 29177)

F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>

²¹⁾ 『朝日新聞』1942 年 4 月 1 日 (朝刊)。

²²⁾ 『愛媛新聞』2021 年 8 月 31 日 (朝刊)。